

クオリアからクオリティへ

—「逆転クオリア」に騙されない批判的思考—

From Qualia to Quality:
A Critical Thinking against the “Inverted Qualia”

高橋 克也*

TAKAHASHI Katsuya

私の目に赤く見えているものが他人には実はまったく違った色、たとえば緑色に見えているのではないか。そのような想像が論理的に矛盾なく成立しうると考えている哲学者たちがいる。しかし、この所謂「逆転クオリア」は、色彩科学が教える諸事実と矛盾する空想であり、不可能である。色彩の体系は何らかの「逆転」を語りうるような単純で対称的な構造をもってはいないからだ。逆転クオリアというこのような空想科学の罠に陥らないためには、知識の追求を怠らないことが何より重要であるが、それに加えて、素朴で単純な日常的語彙を用いるだけでなく、質に関わる様々な関係性を表しうる言語を学び、用いていくことが必要である。本来、質すなわちクオリティとは、知覚における様々な関係性を内包する観念であり、それに対して、クオリアは、比較を絶した没関係的な内容を指すものでしかない。クオリアではなくクオリティの次元で考えてこそ、私たちは、哲学者たちの机上の空論に騙されずにすみ、そして、質をめぐる感性的認識の豊かさに対する本当の洞察をもつことができるのである。

キーワード：クオリア、言語、色彩科学

1 逆転クオリア再論

他人が何かを知覚しているときのその体験内容を私がじかに知ることはできない。だから、たとえば、他人が赤い郵便ポストを見ると、その人は確かに「赤いね」とは言うけれども、果たして私に現われているのと同じあの「赤い」色の感じを体験しているのかわかるとは直接確かめることができない。これは否定することのできない事実である。しかし、哲学者たちの中には、さらに次のようなことまで言う人たちがいる。他人が赤い郵便ポストを見ると、実は私にとっての緑色にあたる色が見えており、逆に、他人が緑色の物体を見ているときには私にとっての赤にあたる色が見えているというような、そんな可能性も否定することにはできないのではないかと。つまり、色に関する体験内容において、私と他人とである種の逆転が起こっていてもそれを知るすべはないのではないかと、というのだ。このような空想は「逆転クオリア」と呼ばれる。クオリアとは、物事の質の知

* たかはし・かつや、埼玉大学人文社会科学研究所教授、哲学

覚における最も核心的な内容のことを言ったもので、それ以上言葉で詳しく説明できないあの「赤い色の感じ」とか「ひりひりする痛みの感じ」といったようなものを指す言葉である。赤と緑の入れ替わりの話などの場合、色の知覚におけるクオリアが逆転しているという想定であり、特に「スペクトルの逆転」、「逆転スペクトル」などと呼ばれる。逆転クオリアないし逆転スペクトルの話は、奇怪ではあるけれどもわれわれの知る経験的事実と矛盾することなくこれを想像・想定することが可能ではないか、と、そのように性急な人たちは考えたのである。そして、他人の心というものはかくまで私からみて底知れぬものでありうるとする、他者をめぐる一種の懐疑論を興味深い論題としてみたり (Wisdom 1956: 10, 野矢 1996: 76)、心は行動や言葉、神経科学的事実などで定義することは出来ないのだと論じて、反唯物論の議論を打ち出したりしてきたのである (Chalmers 1996: 100, 邦訳 135)。

私は最近、この逆転スペクトルという空想を批判する論文の一つ著した (高橋 2021)。スペクトルの逆転が起こっているのに行動の違いとして表れえないという想定は、色彩科学が教える経験的諸事実と矛盾するゆえ不可能であると論じたのである。この批判は、懐疑論や反唯物論の主張をする論者たちだけに向けられたものではなく、彼らと反対の立場には立つものの逆転スペクトルという想定が引き起こす科学的な疑義に関心をもたない、そのような論者たちにも向けられたものであった。実際、科学哲学や論理学を専門とする論者たちが、色彩科学を何ら顧慮することなく色の知覚に関する無責任な空想を真面目に語り続けてきたことは、それ自体がすでに異様なことと言わなければならない。その影響の大きさを見るにつけ、正すことが必須と思われたのである。しかし、そうはいながら、私自身の色彩科学に対する理解も浅く、前掲論文における議論の提示の仕方は不器用で分かりにくいものであった。そこで、特に不明瞭であった部分について別の仕方による説明を提示し、同時に、新しい視点からの考察もつけ加えて、このトピックのいかにわしさをより明瞭にしたいと思う。もちろん、色彩科学に照らした検討はさらに多くの角度から、より精密に行われることが望ましいということも、言い添えておきたい。

以下では最初に、「言動の違いとして表れえない逆転スペクトル」という想像が色彩の構造と法則に矛盾する想像であることを改めて示したい。色相、明度、彩度からなる色彩体系の非対称的構造という問題に焦点を当てることになるだろう。次いで、逆転スペクトルに限らず、逆転クオリアが可能であると人が性急に結論する背景には、言語をめぐる素朴で粗雑な理論があるということを論ずる。単刀直入に言えば、逆転クオリアの話聞いて「なるほどそういうこともありうる」とすぐうなずいてしまう人は、言葉の罫にはまっているのである。

2 逆転スペクトルの不可能性

2-1 哲学的議論の不毛

言動の違いとして表れ得ない逆転スペクトルという空想に関しては、科学的な疑義が明敏な著者たちによって提示されてきたにもかかわらず (Hardin 1988: 140-141; Hilbert & Calderon 2000: 202-203)、そうした疑義を軽視したり顧みなかったりする論者が少なくない。最近の一例として、野矢

茂樹『心という難問』(2016)を挙げておきたい。野矢は、他人はこの私と同じように心をもつのか、私と同じような感覚や知覚内容を経験しているのか、といった他人の心に関する懐疑論的問いを、心にかかわる「難問」の一つとして取り上げる。そして、そうした懐疑論の先鋭でインパクトある一例として「逆転スペクトルの懐疑」に言及している。少し長くなるが、引用しよう。

私とあなたが一個のトマトをともに見ているとする。私はその色を「赤」と言い、あなたも「赤」と言う。だが、二人が「赤」と呼ぶその色は同じ色の質をもっているのだろうか。それは微妙に違うかもしれないし、まったく違うかもしれない。たとえばあなたが「赤」と呼ぶその色は、私だったら「緑」と呼ぶような質をもっているかもしれない。このような懐疑は「逆転スペクトルの懐疑」と呼ばれる。

注意すべきは、これが色覚異常の例ではないということである。ある人たちは、多くの人が識別できる色の差異をうまく識別できない。たとえば赤と緑を識別することが難しい。だが、いま問題にしている「逆転スペクトル人間」はふつうに「赤」と呼ばれるものを一致して「赤」と呼び、「緑」と呼ばれているものを一致して「緑」と呼ぶ。その識別にも困難はない。それゆえ色覚異常の場合にはしかるべき検査によってチェックできるのに対して、逆転スペクトル人間であるかどうかはいかなる検査でも判明しない。コミュニケーションもごくふつうに行われる。逆に、だからこそ、疑おうと思えばいつでも誰に対してでも、「あの人は逆転スペクトル人間なのではないか」と疑いをかけられるように思われるのである。(野矢 2016: 51-52. 強調部分は原著者によるもの)

野矢の意図は、こうした懐疑論を退けることにあるのだが、その意図は哲学的な議論を通して遂行されるべきものと考えられており、この懐疑がそもそも科学的に成立しないのではないかといった問題は顧慮されていない。また、他人の心に関する懐疑論への一般的な形での応答はなされているものの、「逆転スペクトルの懐疑」というこの個別的問題に対する解決は、結局具体的には示されていない。他者問題に関して野矢が示した結論は、一般に、他人に自分と同じ感受能力を認めることはわれわれが常にすでに参与している言語実践の一部なのであり、われわれの「生き方」に織り込まれた前提にほかならない、というものである(野矢 2016: 322)。この観点から逆転スペクトル問題への応答を導き出すとすれば、おそらく、「他人が自分とは逆転した色を見ているかもしれないなどと考えないのが、われわれの言語実践の暗黙のルールなのだ」といったものになるのであろう。だがこれでは、「逆転スペクトルという想定などは採用しないことがわれわれの常識である」と言っているだけのことではないだろうか。野矢の立場としては、常識は極端な懐疑論と比べたとき、他者のありように対する「よりよい」説明になっているのだ、ということの特に強調したいようである(cf. 307)。だが、少なくとも逆転スペクトルの懐疑が問題である場合には、このような主張をもって応答することは不毛であるのみか、人を誤謬へ導く危険をはらむものと言わねばならない。常識は逆転スペクトルと比べて「よりよい」説明であると主張するなら、それは、逆転スペクトルは単に「より悪い説明」にすぎないのだということの意味するだろう。けれども、逆転スペクトル

はより悪い説明にすぎないようなものではない。そもそも成立しない説明なのである。

「哲学的」議論によって逆転スペクトルを退けようとする企ては、どれも野矢が示唆する（と思われる）結論と同工異曲のものになることが容易に想像されるのだが、「科学的に考えてどうなのか」という問題を脇に置いた時点から、その種の議論はみな今述べた意味での「誤り」へ人を導く危険を抱えることになる。そのことを私たちはよく認識しておかなければならない。

2-2 部分的な逆転か体系的な逆転か

赤と緑が入れ替わって見えているが言動の違いとして表れ得ないといった想像は、それでは具体的にどんな矛盾にぶつかることになるのだろうか。

まず、ただちに言えることは、もしもこの空想が、特定の色同士だけが入れ替わっていてそれ以外の色は元のままであるという事態を想定しているのであれば、つまり単なる部分的な入れ替わりを想定しているのであれば、それがすぐに破綻することは明らかだということである。たとえば、赤と緑が入れ替わっているというのなら、少し橙っぽい赤も緑と入れ替わっているのか、少し紫っぽい赤はどうか、といった問いがすぐに生じてざるをえない。赤から橙への移行は連続的であり、赤から紫への移行も同様に連続的だからである。赤が別の色と入れ替わるということは、この連続体からともかくも赤と思われる範囲を切り取って他所へ移し、他所からも同様にして切り取った切片をここへ挿入することを意味している。だが、そのような入れ替わりがあれば色相環上に不連続なところが出来てしまうだろう。したがって、「逆転」が生じている人間が普通人向けの色相環の図版を見たなら、「不連続なところが何か所かある」と言うことであろう。

部分的な入れ替えの想定は、また、次のような困難にもぶつかる。個々の色を名指すときには普通人と逆転スペクトル人間とで言語上の不一致が生じないようにしているとしても、色と色の類似性に関する判断を表明する段になればはっきりとした食い違いが生ずるだろうということである。たとえば、われわれは、赤は橙と似ていると言い、緑は橙に似ていないと言うが、赤と緑の逆転した人は、赤（その人には緑に見える）は橙と似ておらず、緑（その人には赤に見える）は橙と似ていると言うことだろう。

こうした困難があることは明らかなので、「逆転」とは特定の色同士だけの入れ替わりではなく、少なくとも、個々の色相互の関係を維持したまますべての色が何らかの体系的な仕方に入れ替わるということではなくてはならないことになろう。そこで、そうした体系的な入れ替わりの可能性こそが検討の対象とならねばならない。だが、その話に入る前に補足的な考察を一つ添えておきたい。

赤と緑が入れ替わって見えているという空想話を聞いたとき、人は部分的な入れ替わりの話だと理解しているのだろうか、それとも体系的な入れ替わりの話だと理解しているのだろうか。あまり深く考えていない人が案外多いのではないだろうか。話を書いている著者たち自身においてすらこの違いの重要性が意識されているのかどうか、明らかでないことが少なくない。ところで、まさに部分的か体系的かというこの問題の重要性が自覚されにくいという点に、私たちがいかに言葉に騙されやすいかということがよく表れているのである。今見たように、色というものは連続的に変化して他の色に移行しうる関係になっており、「赤」なら「赤」という名前はその連続体のうち典型的

な領域を大まかに指したものでしかない。色の基本名称が単純で、かつ少数個の集合にまとめられるところから、私たちはうっかりすると色そのものもそれと同じような離散的な集合体だと思ってしまうが、実際はそうではないのである。また、色相互の類似性の度合いといった相互関係が無視できないことも、単純な基本単語を耳にしているだけでは気づきにくい。言葉というものの不十分さを自覚していないと、実際の諸対象がもつ関係性が忘れられ、短絡的な結論を出してしまいやすいのだ。色のクオリアの逆転が可能であるという第一印象もこの種の短絡的な結論のよい例である。一般に、色のクオリアの逆転が可能であるという第一印象をもつ人は、色の名前と色に関して、次のような図式を漠然と思い描いているのではないだろうか。色の体系というものはバラバラに存在するカルタで表示できるようなもので、異なった色が塗られているそれぞれのカルタに「赤」とか「緑」とかいった言葉が対応づけられている。そして、赤と緑が入れ替わるとは、このカルタの中の一对が置き換わるだけのことなのだ、と。しかし、事はそのように単純ではない。連続的移行や類似性といった相互関係をもちながら色彩は体系を構成しているのだから。従って、色のクオリアが逆転しているが気づかれないと言うときには、少なくとも、そうした相互関係の複合体という意味での「体系」のレベルにおいて逆転を考えなければならないのである。このことすらはっきり想起されにくいところに、最初の躓きの石がある。

だが、それでは体系が逆転するとはどういうことなのであろうか。また、その体系は何らかの意味での「逆転」を語りうるような構造的性質をもっているのだろうか。色彩科学に照らした検証が本当に不可欠になってくるのはここからである。

2-3 色相、明度、彩度の相互連関

体系的な逆転ということで人が想定しているのは、色相環の回転や反転による色の入れ替わりのことであると思われる。「逆転」らしい想定を考えるため、補色同士が入れ替わることになるような色相環の回転ないし反転を考えることにしよう。

この想定は一見簡単なことであるように見えるが、決してそうではない。私たちは、ともすると、色相環の図版で見るような円形に並ぶさまざまな色は色相だけが異なっていて明度や彩度に関しては同じなのだ、と考えがちだが、実際はそうではないからである。色相環上の色は、彩度はおおむね揃っているが、明度においてははっきりと異なっている。たとえば、そこでは黄色や橙は明度が高く、赤や紫は明度が低い。黄色や橙は本質的に明るい色であり、赤や紫は本質的に暗い色であるため、このようになるのである。特に黄色はかなり明るい色であり、それに比して、黄色の補色である青紫はかなり暗い色である。これは決して単なる気分の問題などではない。黄色と青紫の並んだ図版を白黒コピーすると、黄色の所は白っぽく写り、青紫の所は黒っぽく写るという物理的客観性のある話である。したがって、色面が反射する光の量という点で、それゆえまた見た目においても、黄色は白に近い色であり、青紫は黒に近い色なのである。さて、黄色と青紫の間にこうした大きな明度差があるとすると、色相環の回転や反転によってこれら二つの色がちょうど入れ替わって見えている逆転スペクトル人間を仮に想像してみた場合、一体どんな帰結が生ずることになるのだろうか。彼と普通人とのコミュニケーションに齟齬が出てくるという結論になることは明らかで

ある。彼は、「黄色」（彼には青紫色に見えている）を暗い色であると言い、「青紫」（彼には黄色く見えている）を明るい色であると言うと考えなければならないからである。もっとも、これは物理的・生理的には意味不明の事態であると言わねばならない。光を多く反射する色面がその人には「暗く」見え、光を少なく反射する色面がその人には「明るく」見えているわけなのだから。だが、単純に色相環が 180° 回転する形で見えていると想定する以上は、こう考えるほかならう。かくて、明度の評価に関する異常さにより「逆転スペクトル人間」であることが露呈する、という結論になるのである。

なお、ここで、逆転スペクトル人間も普通人と同じように「黄色」を明るい色であると言い、「青紫」を暗い色であると言う、という話を作りたいと考える人もいることだろう。それはおそらく、逆転スペクトル人間には黒と白のクオリアも普通と逆転して現象しているのだという想定を加えることを意味しているのであろう。だが、そのような想定を加えたとしても、以下で述べてゆく構造的な非対称性という問題を克服することはできないということをあらかじめ言っておきたい。また、前回の論文でも述べたことだが、普通の人の知覚において白と黒は種々の対照的な視覚効果をもつということも忘れてはならない。白や白っぽい色は膨張色として知覚され、黒や黒っぽい色は収縮色として知覚されるという事実がその一例である。白っぽい色の服を着ている人はふっくらして見え、黒っぽい色の服を着ている人はスマートに見える。だから、黒と白がちょうど逆転して見えている人がいたら、ふっくらしているかスマートであるかについて、普通と逆の評価を下すことであろう。

明度に関係する以上のような困難を回避するため、今度は次のように想定を修正すべきであると逆転クオリア・ファンは考えるかもしれない。明度差を含むような色相環の図版をもとにして考えるのではなく、あくまで互いに明度の等しい色同士で色相の逆転が起こると想定するのだ、と。黄色が明るい色であるというなら、黄色が明るい青紫と入れ替わると考えればよいということである。だが、このような想定も机上の空論であることに変わりはない。同じ明度の黄色と青紫を対応づけようとするのはもちろん大事なことであるが、「逆転」が露見しないためには明度だけではなく彩度もだいたい一致しているのでなければだめである。だが、異なる色相の間に、明度が一致していてそのうえ彩度まで同じであるような対が常に見出せるとは限らないのだ。十分に鮮やかな、つまり彩度の高い黄色の場合を考えてみるとよい。すでに述べたように、黄色の本質から言って、そのような典型的な黄色はかなり明度の高い色であるはずである。これと明度を等しくするような青紫はもちろん存在するが、そのうえ彩度までも同じと言えるようなものは存在しない。明度の高い青紫は薄紫であるほかに、薄紫とはすなわち彩度の低い紫なのだから。彩度の高い青紫であろうとしたら、もっと明度が低くなければならないのである。こういう次第だから、鮮やかな黄色が明るい青紫に見えているような逆転スペクトル人間を想定し、明度に関する破綻を何とか抑え込んだとしても、彩度に関するその人の証言が通常と食い違うことを阻止することはできない。普通人が「鮮やかな」黄色だと言うとき、逆転スペクトル人間はそれに同意しないはずだ。

黄色と青紫の例から分かる通り、明度にも彩度にも異変をきたさないまま色相だけが入れ替わるという想定を破綻なく貫くことは不可能である。明度が一致していても彩度の一致する色が見出せ

なかったり、逆に彩度が一致していても明度の一致する色が見出せない、といった場合がありうるのである。だから、逆転を想定すれば普通人とのコミュニケーションにおいて必ずどこか齟齬が生ずるという結論になる。このことは、黄色と青紫に関してだけでなく橙と青についても言えるし、程度はより小さいにしろ赤と緑についても言えることである。要するに、色相、彩度、明度の3要素から見た色彩の体系は、何らかの「逆転」をほどこしても元の諸関係と区別がつかないということが考えられるような対称的な構造をしてはいないのである。

2-4 色立体から考える

ここまで述べたことはとても複雑な話に聞こえるかもしれないが、色立体を参照すれば簡単にイメージでき、得心がいくはずだ。マンセル表色系 (Munsell color system) の色立体を参照するのが合理的であろう。マンセルのシステム (ここで参照するのは、正確には修正マンセルシステムである) では、心理尺度を重んずる形で、色相、明度、彩度の差がそれぞれ見た目に等間隔になるよう、色が配列されているからである。彩度の関係について感覚と一致しない部分もあるが、それほど深刻なものではない¹。このシステムにもとづく色の立体的表示においては、上下の軸が明度の諸段階を表わし、この軸の周りを囲むように様々な色相が、色相環と同じ順序で配置されている。同じ色相の色でも明度の高いものは上方に位置づけられ、明度の低いものは下方に位置づけられるわけである。そして、中心の軸から外側へ向かうにつれて彩度が高くなるようになっている。最内奥は無彩色 (グレー) であり、一番外側がそれぞれの色相において最も彩度の高い色である。さて、このようにして図式的に構成された3次元の立体、すなわち色立体は、かなりいびつな形をしている (図1)。それは、明度と彩度の相関の仕方が各色相ごとに異なっているからなのである。

黄色と青紫の例に即してこのいびつさが意味するところを確認してみよう。黄色の、それも5Yと名づけられた代表的な色相に関して、縦軸で明度、横軸で彩度を表わしつつそのバリエーションを表示したものが図2である。これは色立体をこの色相の方向に合わせて縦に切り下した際の断面図にあたり、等色相面と呼ばれる。他方、図3は5Yから180°回転した方向にある5PBという色相の等色相面 (代表的な青紫。マンセルシステムでは「紫青」と呼ぶ) である。二つの等色相面を見比べると、両者がかなり異なった様相を呈していることがすぐに分かる。黄色の場合、最も彩度の高い色はかなり明度の高いところに位置している。黄色が本質的に明るい色であるというのは、つまりこのことである。そして、明度が下がるにつれて急激に彩度が落ちてゆくようになっているところから、この特徴が際立ったものであることが分かる。これに対し、青紫の場合、彩度の高い色は明度の低いところに位置している。ただし、黄色の場合ほどには高い彩度まで達しない。そして、黄色とは逆に、あるところ以上に明度が上がると急に彩度が低くなっていく。青紫が暗い色であると言われる所以である。このように、二つの等色相面の図は、補色の関係にある二つの色同士が対称的な構造を形成しはしないことをひと目で分からせてくれる便利な図である。調べると分かるが、黄色と青紫のみならず、他の諸々の色相も、明度・彩度の相関をそれぞれに固有の仕方で有してい

¹ 高彩度色のところになると、異なる色相間の彩度の等価性が感覚的印象と一致しなくなってくるのである。識別閾を分割の単位としてそれぞれの色相ごとの彩度を決めていった結果であるようだ。

る。だから色立体が全体としていびつな形になるわけであり、それはつまり、色彩の体系が対称的な構造をもってはいないということを意味しているのである。

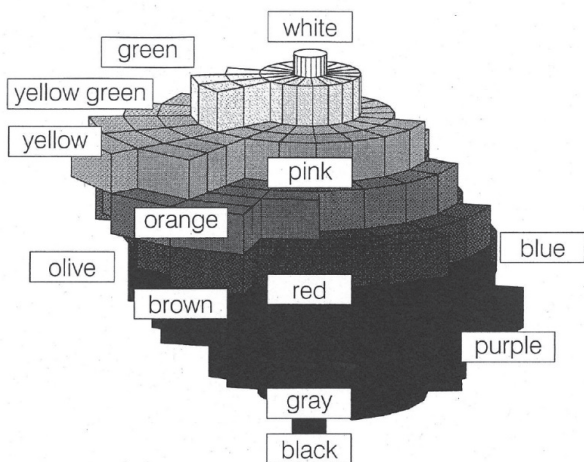


図1 マンセルの色立体と ISCC-NBS 色名法（レベル1）による色名
 (色彩検定協会 2019、1 級編：61 をもとに作成)

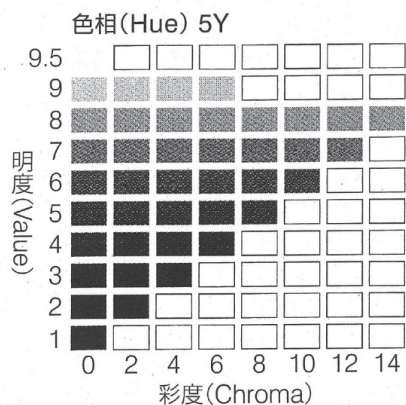


図2 色相 5Y（黄）の等色相面
 (色彩検定協会 2019、2 級編：37 をもとに作成)

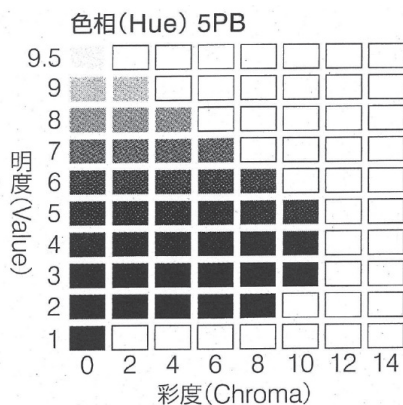


図3 色相 5PB（紫青）の等色相面
 (色彩検定協会 2019、2 級編：37 をもとに作成)

2-5 進出色と後退色の問題

色相、明度、彩度の相互連関という観点から「逆転」の不可能性を論じてきた。これに加えて、色

に関わる重要な視覚効果をもつ意味にも目を向ける必要がある。この観点は私の前回の論文において最も詳説されていた点であり、これについて新たに付け加えるべきことはない。しかし、重要な観点であることに変わりはないので、もう一度手短かに述べておくことにしよう（すでに触れた膨張色と収縮色という現象はそうした効果の一つである）。私が特に重要と考えるのは進出色と後退色の違いという問題である。

一般に、赤、オレンジ、黄色などは手前へ出てきて見える「進出色」であり、緑や青は奥へ引っ込んで見える「後退色」である。そして、この違いは様々な実際の場面で利用されている。危険や禁止を表す信号の色が赤なのは、赤が前へ出てきて見える色だからである。イタリア・レストランの看板などで、緑の地に赤い文字が描かれているのを目にすると、赤い文字が前へ飛び出してくるように見える。そして、あまり気づかれにくいが進出色と後退色の違いが巧みに利用されている領域が、絵画である。画家は、手前へ出てきて見えるようにしたい所に進出色を混ぜ、奥へ引っ込んで見えてほしい所に後退色を混ぜるのだ。特にやりやすいのは手前に赤をまぜ、奥に緑を混ぜる方法である。こうした方法が適切な仕方で行われたなら、画面に三次元空間のような奥行と立体感が生まれてくる。では、もしも私の知覚内容と他の誰かの知覚内容とで赤と緑がちょうど入れ替わる関係になっているとしたらどうだろうか。絵画作品において、私には手前へ出てきて見えるところが彼には奥へ引っ込んで見え、私には引っ込んで見えるところが彼には手前へ出てきて見えることだろう。画面上のどこに進出色を知覚し、どこに後退色を知覚するかというその位置関係が入れ替わってしまうわけである。そして、私の知覚と彼の知覚のこのような相違は、作品の奥行や立体感に対する評価の顕著な齟齬として表れてくるであろう。赤と緑が逆転して見えているのにその異常が表面化しえないという話が物事の実際を無視した空論であると私が気づいたのは、このようなことに考えが至ったときであった。それは、私自身の趣味の絵画制作における経験から出てきた気づきであったのである。

逆転スペクトルの可能性を擁護したい人は、赤から進出色という性質を切り離し、緑から後退色という性質を切り離した想定を行えば、気づかれない形の逆転が思考可能となるのではないかと、という議論をするかもしれない。しかしながら、そのように想定された赤はもはや私に現れているのと同じ赤ではないし、そのように想定された緑も私に現れているのと同じ緑ではない。私の経験している赤は、あくまで、緑と同じ画面に置かれたときに相対的に前へ出てくるあの色なのであり、私の経験している緑も、赤より引っ込んで見えるあの色なのである。だから、少なくとも、他人には赤が私にとっての緑と同じものとして見え、緑が私にとっての赤と同じものとして見えているというような想定は成り立たないのだ。

3 逆転クオリアと言語の問題

行動の違いに表れ得ない逆転スペクトルなるものが色彩科学に照らして不可能な考えである、ということ、ここまでの一連の議論によって明らかになったことと思う。次に考えてみたいのは、人はなぜ、少し調べてみれば科学的・経験的諸事実との不整合が判明する可能性があるのに、そのことに思い至らず、この種の話をもっともだと感じてしまうのだろうかという問題である。もちろん

ん、最大の要因は知識の不足である。そして、一般に知識の不足ゆえに誤りを犯すことについては、致し方のない面もある（ただし、多年にわたって「逆転スペクトル」言説を振り撒いてきた哲学者たちについては、知識追求に対する無関心の度が過ぎていているという非難があてはまる）。だが、それだけではなく、この話題が語られ、論じられるときの言語の大雑把さも少なからず重要な要因をなしているのではないだろうか。私の考えでは、言語と対象の関係に関する、科学的思考とよく整合するような哲学的省察をもっていけば、この種の空想話に対してもう少し用心深くあることができるに違いないのである。逆転スペクトルはもとより、一般に逆転クオリアのようなものが想定可能だと感じてしまう人には、この種の省察が不足しているのだ。

3-1 言語の陥穽

私たちは、日常生活の多くの場面においては、自分の体験している質的内容を単純で端的な語彙で言い表している。「赤い」、「明るい」、「硬い」のような事物や環境のありように関わる基本的語彙に始まり、「ずきずきする」とか、「わくわくする」などの身体的、感情的な状態に関わる語彙に至るまでその範囲は広い。こうした語彙は直接経験しながら学ばれたものであり、言葉の体系において原初的と言える位置を占めるだけに、別の言葉でその含蓄を余すところなく言い尽くすことは不可能である。だが、だからといってこれらが一切の解説を受け付けられないようなものだと断ずるならば、それも大きな誤りだ。それでは辞書的な説明や学術的な分析・再定義が一切無意味だということになってしまうだろう。実際には様々な説明、言い換え、再定義が立派に意味をもち、私たちのコミュニケーションにおいて大きな役割を果たしているのである。たとえば「ひりひりする」痛みと「ずきずきする」痛みの違いはと言われたら、「ひりひり」の方は表面・表層の痛みであり、「ずきずき」の方は深部の脈打つような痛みである、といった説明が可能であろう。そしてこのような説明、ないし言い換えは、医者と対話するときなどには必要となってくるはずである。

ここで少し考えてみてほしい。「ひりひりする」感じと「ずきずきする」感じが私と他人とで実は逆転して経験されているかもしれないのだが、それを確かめる術がないと言われたとする。何となく「そういうことも想定可能ではある」と感じる人がいるかもしれない（特に逆転クオリアの話に書物や講義で慣らされている人はそう感じることだろう）。他方、事態を説明的な語彙で定式化し直し、私と他者とで実は「表面の痛み」が言い表しているものと「深部の痛み」が言い表しているものが逆転しているのだが、確かめられない、と言われた場合にはどうだろうか。つまり、逆転クオリア人間であるその他者が「表面が痛い」と言っているとき実は深部が痛いのであり、彼が「深部が痛む」と言っているとき実は表面が痛いのであると。それでいてずっとコミュニケーションに齟齬がないということが考えられるだろうか。「まさか」、と普通は思うことだろう。そのように普通と違っている人にあっては、身体を検査する医者とのコミュニケーションにおいてたびたび奇妙な食い違いが生ずることだろうし、その他のコミュニケーションの場面でも、「表面」と「深部」の意味をめぐってどこかで重大な齟齬が生ずるに違いないのである。単純な、その意味で本来の質的な語彙によって体験を言い表しているときには、逆転クオリアという想定が可能であるように見えるが、複合的かつ説明的な言い回しでその語彙を言い換え、あるいは敷衍したとたんに話が怪しくな

ってくる。ということはつまり、逆転クオリアがもっともらしく感じられるのは、体験されている質を単純な言葉で言い表していることに起因していると考えるべきではないだろうか。

もう一例検討してみよう。こんな逆転クオリアが想定可能だと言う著者がいる。二人の人がチョコレートに口にして、「とても甘いチョコレートだね」といった言葉を交わしているのだが、一方の人には甘味のクオリアが体験されているのに対し、他方の逆転クオリア人間には酸味のクオリアが経験されているのかもしれない、と（金杉 2007:69）。一見、想定可能な話であると思われるかもしれない。しかし、このような話に関しても、少し冷静であれば疑問がいろいろと浮かんでくるはずである。普段の経験を振り返るだけでも、酸味の感じは舌の先、脇、そして喉のあたりに滲みるような刺激を感じる感覚であるのに対し、甘味のほうはそうした刺激を欠いた感覚であるという違いがある。この違いは酸味の度合いと甘味の度合いを大きくしてみればいっそうはっきりしてくるだろう。レモンのような酸味の強いものを食べたら、舌や口腔内はもとより、喉の奥や胃の中にまで同質の刺激が生ずるのを感じるはずである。甘味と酸味に関する逆転クオリア人間は、こうした場面に共通する「滲みるような刺激」の有無に関する知覚が普通と逆転していることになるわけだが、その異常が露見しないと考えることがはたして可能であろうか。様々な場面を考える必要がある。たとえば、性質は異なるにせよ同じように刺激性が強いところの辛いものや熱いものを口に入れたとき、彼はやはり「刺激がない」、何か穏やかな感覚を感じるようになるのだろうか。逆に、ぬるま湯を飲んだときには強い刺激を感じるのだろうか。また、レモンの汁がうっかり目に入ったときと、砂糖水がうっかり目に入ったときでも、刺激の有無の感じが逆転しているのだろうか。このように、この逆転クオリア人間の物語がいくらかでも真実味を獲得しようと思うなら、刺激の感覚の有無が鍵となるような多くの場面に関して整合的に構成される必要があるのであり、それでいてなお、通常人とのコミュニケーションにおいて一切齟齬が生じないというふうにもなっていなければならないのだ。こんな事態が破綻なく思考可能であるとはちょっと思えないのである。

この例においても分かる通り、単純な一つの単語で知覚経験の内容を指している間は何となく逆転を語りうるように見えても、複合的な言い回しで内容を解説したとたんに疑問が尽きなくなってくる。「逆転」が他から孤立した二つの内容の入れ替わりのようなものではなく、関係する様々な場面に波及する問題であると認識されるようになるからだ。色のクオリアの逆転についても、それが可能であるかのような第一印象は「赤」、「緑」のような単純な単語で質が語られていることに多く起因していることを私たちはすでに見た。そこで、問題は孤立した二つの対象（事象）の置き換えといった単純な話ではないと気づくことが、批判的熟慮の第一歩であると確認されたのだった。そこで、単純な単語でしか言い表しえないような質的内容を複合的な言葉で解説、再定義することがどういうことなのか、なぜそれが「逆転クオリア」の空想と相性が悪いのかについて、さらに詳しく考えてみなければならない。

3-2 質の言語から関係の言語へ

「赤い」、「緑色である」、「明るい」、「ひりひりする」のように、知覚内容の質を短く単純に言い表すような日常単語を「質の言語」ととりあえず呼んでおこう。このような語がコミュニケーション

ンの基礎的部分で働いていることは言うまでもないが、他方では、私たちは、これらと同種の内容に関わる発話において、様々な複合的な言い回しを用いることも多い。そうした複合的な言い回しには、質の言語を代替する形で用いられるものもあれば、質の言語が複合し、それによって新たな内容を獲得しているというようなものもある。質の言語を代替する複合的な言い回しとしては、すでに挙げた「表面が痛い」、「深部が痛い」などが挙げられよう。「赤は、波長 610nm～750nm の電磁波が標準的な環境で人間の視覚に喚起する色である」という類の説明もそうである。こうした言い方は、物理・生理的な事象を参照しつつ、質的なものを質的でない語彙によって言い換えることを目指している。語の辞書的・事典的な説明に利用されるもので、感覚的内容を言い尽くすものでももちろんないものの、当該語彙の理解を大いに助ける働きをなすものである。他方、質の言語が複合して作り出す表現は、質的な語彙を基礎にしながら質の様々なニュアンスを表そうとするもので、実際の、実用的な場面で頻繁に用いられている。「甘酸っぱい」、「苦みの中に酸味が少し混じっている」などがそうである。とりわけ色彩の表現においては、結合によって生み出されるそのバリエーションはかなり多い。「赤紫」、「暗い緑」、「少しオレンジがかかった黄色」など、多様なニュアンスを言い表す潜在力を色に関する私たちの言語はもっている。さらに言えば、「少しだけ温かい」とか「弱い紫」など、程度に関する限定を受けただけの表現も、一種の複合的な言い回しだと言えるだろう。

今述べたこの「程度」に関する限定という観点は、実は非常に重要な発展性をもった観点である。「温度」、「明度」などのように、質が呈示するいろいろな程度を私たちは定量的な概念として整備し、測定方法の確立を通してこれを客観的に利用可能なものにしてゆくことができる。そうして、質のニュアンスに関する科学的な取り扱い、およびそのための語彙を発達させてゆくのである。色相もまた種々の度合いを経由して連続的に移行するものとして捉えることができる。色という質を、このように種々の度合いの観点から科学的に把握しようとする試みの成果として、たとえば、マンセル表色系のような表示体系が作られてきたわけである。この体系には、色の度合いに関する三つの次元を交叉させた精密な複合的な言語表現が登場する。〈2.5R 4/14〉とえば、それは色相が 2.5R (少し紫がかかった赤)、明度が 4、彩度が 14 であるような色のことである。このような科学的、専門的な言語表現は、その根底において質の言語を陰に陽に含む複合表現であるが (たとえば今の例の中に登場する「R」——“red”の頭文字——は明らかに質の言語の一形態である)、日常的で大雑把な質の言語に対して、必要に応じて代替の働きをしているとも言えるだろう。

質の言語を代替する複合的な表現であれ、質の言語の結合が作り出す複合的な表現であれ、その特徴は、言い表されている質の内容が体系性をもった何らかの事象領域に属していることを暗示しており、またそれを前提としている点である。つまり、私たちが質に関する複合的な言い回しを生み出すということは、その質が関係する事象領域の様々な関係性を言葉に反映させようという姿勢で言語実践を行っているということなのである。たとえば、「黄色っぽい緑」とか「緑っぽい青」という言い回しは可能だが、「オレンジっぽい緑」とか「黄色っぽい青」という言い方はしないものであり、「緑っぽい赤」というものもありえない。類似性という関係において比較的近いもの同士がここでは複合語を構成しようようになっており、関係が遠いとそのような結合をなすことができない。これ

は単なる言語上の任意な取り決めのことではなくて、色彩という事象領域そのものが持つ関係構造に基づいて出来上がってきた規則である。私たちは事象領域の関係構造に即して言語上の結合法を作り出し、逆にまた、言語上の結合法をもとにして事象領域の関係構造をより詳細に探索するということを行っているのだ。このプロセスの中で形成され、受け入れられてゆく質の複合的言語表現を「関係の言語」と呼ぶことにしよう。質といういわく言い難く見える内容について、人は単純な「質の言語」から出発し、複合的であるところの「関係の言語」を発達させてゆく。そして、質の言語の場合、それが特定の内容を指すことの根拠は取り決めや慣習でしかないが、関係の言語の場合、それが事象内容と結びつくことの根拠は双方の関係構造の一致、つまり言語の結合規則と事象の秩序の間の構造的な同型性である。従って、関係の言語は単に質的事象を名指すだけの恣意的な符牒にすぎないものではなく、質的事象のありようを記述している言語なのである²。

言語というものがバラバラの事象を個別に名指すものでしかないなら、ある人と別の人において語が異なる内容を指しているのにそのことが表面化しえない、といった物語をもっともらしく構成することは、場合によっては難しいことではなかろう。その場合とは、扱われている事象が知覚経験の内容という私的な領分の事象であるときである。だが、実際は、事象は（知覚経験の内容の場合であっても）バラバラに存立しているのではなくて関連し合っているし、言語は事象の関連を記述するものでもある。そうした言語、つまり記述的な言語としての「関係の言語」が表す内容は、決して私秘性の闇に包まれたものではないのである。カルナップが的確にも指摘している通り、「個人の体験流の質料」を人間同士で比較することは不可能であるが、「ある種の構造特性」はすべての体験流において一致することが確認できる (Carnap 1928: 90-91)。色の経験の場合で言えば、色 A がある人にそれ自体としてどんなふうに見えているかは他人には分からないとしても、たとえば「色 A と色 B は似ているが色 A と色 C はそれほど似ていない」といった類似性と相違の関係については、間主観的な論究と研究が可能なのだ。こうして、行動の違いとして表れえない逆転クオリアが想定できるという主張は、関係の言語でパラフレーズされたとき、一つの実証的探究の案件として吟味に晒されるようになるのである。

3-3、質への間主観的アプローチを可能にするもの

知覚的質を関係の言語で説明したり再定義したりすることは、具体的にどのような仕方で逆転クオリアを退ける可能性をもつことになるのだろうか。大きく分けて二つの仕方があると考えられる。

3-3-1 外延量とのつながり

一つは、知覚されている内容が空間的・時間的・物質的な関係や量へと適切に翻訳される、ないし関連づけられることによるという仕方である。一般に、この種の関係や量についての認識は間主観的に共有できるものであり、それゆえ、そうした認識にうまくつなげることができれば、人が語

² ハリソンも、色に関する語彙というものは単に色を名指すだけでなく、規則性ある複合を通して色を「記述」（色について情報を伝える形で語る）しうような体系を形成していると強調する。色のクオリアの入れ替わりを語る論者たちは色の言語のこうした性質を見落としているのだ、という彼の指摘は正当である (Harrison 1967: 42, 46)。

る体験内容を相互に確かめ合える可能性が開けてくるわけである。「ずきずき」を「深部の脈打つような痛み」と説明する例などは、このもくろみが功を奏するケースであると言えるだろう。「関係の言語」のうち、質的なものを質的でない語彙によって言い換える試みは、それが客観性や学知を志向するものであり限り、空間的・時間的・物質的な関係や量へと話を関連づけようとする企てである。簡便のため、このような企てを、「外延量に親和的な事象領域への関連づけ」と呼ぶことにしたい。外延量とは、部分の量と全体の量が算術的な加算の関係として論じられるような量であり、長さ、面積、質量などがその代表である。長さを例にとりて説明すると、棒Aと棒Bをつなげて一直線にしたとき、全体の長さは棒Aの長さ+棒Bの長さを足し合わせたものに等しい。このような性質、すなわち「加法性」をもつがゆえに、長さという量は外延量とみなされるのである。ここでは、しかし、外延量という定量的な観点を導入すること自体が重要であるわけではない。この観点を適用できるような事象領域は直接的、間接的に観察し、比較することのできる諸部分からなっているということが重要なのである。「外延量に親和的な事象領域」という言い方はこの特徴を念頭に置いたものにほかならない。外延量に親和的な事象領域の中でも、空間は、諸部分とその関係を直接観察することが容易であるため、問題の間主観的な検証のために特に有効かつ重要な領域である。

とはいえ、空間・時間・物質の領域に関連づけることに成功したからといって、必ず逆転クオリア仮説を検証するための説得的な観点が確保されるというわけではない。赤という色を電磁波の波長と関連づけて定義しても、その定義は質的内容に何も言及していないから、体験されている質そのものが間主観的な論評を受けつけるようになったわけではないと感ずる人がいるに違いない。そういう人たちが、逆転スペクトルという話に論理的な可能性を認めたがるわけである。この逆転スペクトル信者たちを物理的・生理的な実証性の地平へ歩み出させるために必要となるのは、おそらく、関係の言語が表しうる関係性の網の目をもっと増やしてゆくことである。特に、色という質的内容の領域そのものに内在する様々な関係を明らかにしてゆくこと（「赤」や「青」といった単純な諸観念を取り上げるだけでなく、色彩のさまざまなニュアンスを複合的な言い回しで語る）が重要であり、そうした関係と、物理的・生理的事象における諸関係との間に、どんな緊密な連関があるかを示してゆくことが求められるであろう。今のところ、私にはその方向での議論を提示する用意はない。けれども、今述べた事柄の中には次に取り上げる第二の論点が含まれており、この第二の論点は、それだけでもすでに、逆転クオリア信仰に対する解毒剤に十分なりうるものである。

3-3-2 内包量の探求

関係の言語の探求が逆転クオリアを退ける第二の仕方は、質という事象領域に内在する諸関係の研究を促すことによる仕方である。カルナップが注目した認識プロセス、すなわち、質に関する類似性や差異の関係を体系的に関連づけてゆくプロセスが、そうした研究における基本的な戦略である。色という質の領域においてこの戦略を遂行してゆけば、色彩の体系的構造を把握できるようになるだろう。そして、その構造ははたして「逆転」しても変わらないような対称的な構造であるかを調べられるようになるだろう。これは十分に実証的で科学的なアプローチであり、前節で私た

ちが確認したような逆転スペクトルの科学的矛盾は、このアプローチの中で見えてきたものだったのである。

質の事象領域に内在的な仕方で行われるこうした科学研究にとっては、実は、質に関してもある種の定量的な扱いが可能であるという事実が重要な役割を果たしている。色彩の体系的構造の骨格をなす色相、明度、彩度という三つのパラメーターは、いずれも「度」という量的な概念であった。これらの「度」は、それぞれある種の類似性の関係に関する知見が複合してゆくところに成立した科学的な概念である（たとえば明度の概念は、白にどれくらい似ているかという類似性の観点にもとづく順序づけによって成立する）。そして、三種類の度の観点から種々の色彩を系列化し、相互の相関の仕方を明らかにしていく中で、色という質の体系が対称性をもたない構造をしていることが見えてきたというわけなのである。このことをふまえつつ、第二の方向における歩みを第一の方向でのそれと対比して、「内包量の体系的な研究」と呼ぶことができるだろう。内包量とは、数学的に扱うことはできるけれども、加法性が成り立たないような量のことであり、「度」と名のつくものの多くがこれにあたる。たとえば温度がそうで、30°C のぬるま湯と 40°C のお湯を混ぜたら 70°C のお湯になるのかということ、そんなことはない。30°C と 40°C の間のどこかの値になるはずだ。明度についても同じことが言えて、白にグレーを混ぜたら中間の、明るめのグレーができるだろう。色相についても同様である。内包量の大小は部分と全体の関係としては表せないが、様々な中間的段階を経る連続的変化の相において捉え、精密な扱いの対象とすることができる。このようにして、質が何らかの度の系列として表象されるようになり、しかも系列が一つでなく複数あって交叉し、重層化するようになると、質はかなり複雑な関係性を内包していることが明らかになってゆく。そこで、逆転が考えられるかという問いの検証もできるようになるのである。

進出色と後退色の相対性も、一種の「度」における相違の関係であると言えよう（青と緑を混ぜたらもっと「後退する」色が得られるかということとそんなことはない）。この関係は、仮象という形ではあるけれども、空間性の知覚を左右するような効果をもっている点が特徴的であり、この特徴ゆえに逆転スペクトル批判において功を奏することとなったわけである。

内包量が空間性と関わりをもつのは、しかし、進出性・後退性の場合だけではない。一般に、度の連続的変化は空間における線ないし帯のイメージに視覚化して表現することができる。グラフがそうであり、色のグラデーションもそうである。「色立体」などはまさに、色という質が内包する諸関係を空間的イメージで把握できるという明瞭な自覚の所産にほかならない。このように、疑似的な仕方であれ、質の関係性を空間的表象に置き換えることができるおかげで、質に関する客観的な取り扱いと議論に道が開けてくるのだ。特に、色は、もともと一定の空間的拮据の中に知覚される質であるから、その関係性を空間的イメージを借りて表すことにはほとんど違和感がない。だから、進出性・後退性の場合のように、イメージ化された関係性が、そのまま空間知覚そのものに影響を与える仮象として働くこともありうるわけである。

質の概念が内包量をもつということの実際的な射程に早くから注目していたのは、カントであった。「すべての現象において感覚の対象にほかならない実在的なものは、内包量を、言い換えれば、度をもつ」（Kant 1781/1787: B207）という原則をカントは提示し、これを、（ただの思弁に

においてではなく) 実際の経験において「質」の概念を使用するための原則であると位置づける。ここで「実在的なもの」と言われているのは、知覚されている質のことである。この「質の原則」のさらに具体的な応用手順を表したものが「質の概念の図式」であり、それは「時間におけるこの実在性の連続的で一様な産出」(A143/B183)と定式化されている。たとえば暖炉に薪をくべて部屋の暖かさを徐々に高めてゆくとか、赤に少しずつ黄色を混ぜて色相の変化を観察するといったことであろう。そして、時間は線という空間的形象によってイメージ化されるといふ、別の箇所でのカントの指摘をふまえれば(B154, B156)、度の連続的変化という時間的プロセスを、線や帯のイメージで表しなさいという教訓を引き出すことができるだろう。実際、この教訓にならうように、人間は水銀柱の温度計や、色のグラデーションの図、ひいては色相環や色立体などのような、度を視覚化する種々の具体的方法を工夫してきたわけである。カルナップが、色の類似性の関係を色立体として構造化するプロセスを論理的に再構成してみせたのも(Carnap 1928: 113-114)、カント的な「質の原則」と「図式」の一つの詳細な敷衍の試みとして見ることができる。

4 クオリアからクオリティへ

カントの原則や教訓を現代の哲学者たちがもっと真面目に受け入れ、そして自ら使ってみるということをやっていたら、色のクオリアの逆転などという空想科学が長く流行することもなかったかもしれない。そして、他人の心に対する懐疑論が若い読者たちを惹きつける度合いも、今よりは小さかったかもしれない。カントは彼の質の原則を「知覚の予料」と名づけている。「予料[先取り]」(Antizipationen)とは、実際に経験してみる前から分かるということであり、それゆえ「知覚の予料」とは、知覚の内容について直接経験してみる前から分かること、という意味である(知覚される質には度があるということは予め分かっている、ということだ)。この「知覚の予料」という思想がもつ価値は、他人の知覚経験を考えるときによりよく分かってくるであろう。他人の心に映じているものを直接経験して知ることは、私には確かにできない。けれども、他人が質に関する類似性や差異を私と同じように知覚しているということは、当人の心に入り込まずとも想定でき、確かめ合うことができる。それが「知覚の予料[先取り]」であり、この考え方は、他人が「逆転スペクトル人間」のような怪人ではないということを実証できる潜在力をちゃんともった、心強い知恵なのである。

私たちは赤や緑や、甘さや酸っぱさといった質に関し、説明不可能な「こういう感じ」というものだけを知覚しているのではない。類似性や差異という相対的・関係的なものも知覚しているのである。内包量という概念はそのことを自覚させてくれる点でとても意義深い概念だ。カントが「質の原則」の中心テーマとしてこの概念を問題にしていることから分かるように、「質」とはそもそも類似性や差異の知覚までも含めて言われる何かなのである。事実、私たちがふだん質について語り合うときも、言及されているものは類似性や違い、そしてグレード(品質の高さ)などの関係的なものであることがほとんどではないだろうか。コーヒーの味について、苦みがどのくらい強いのか、苦みに酸味が少し混じっていないか、どちらがより味わい深いのか、等々のことを人は語る。いかに

多くの「関係の言語」が、陰に陽に用いられていることか。そして、質に関する鋭い感性をもった人とは質が内包する様々な関係性を知覚する人のことであると、私たちは現に考えているのではないだろうか。質を知覚する人とは、つまり、「違いが分かる人」なのである。

本来の意味での「質」(クオリティ、quality、ラテン語では *qualitas*) とは、このように関係性と比較を含みうるものと理解された限りでの感性的事象である。これに対し、「クオリア」(*qualia*、単数形は *quale*) とは、「どのような」という意味のラテン語であり、「こういう感じ」というより以上の内容を表していない。それは没関係的な何かであり、言うなれば質未満の質である。私が知覚している質(クオリティ)については、他人が知覚している質(クオリティ)と比べて、同じとか違うとかを論じられる可能性がある。だが、私に現れているクオリアを他人のクオリアと比べて同じとか違うとか言うことは、クオリアの没関係性ゆえに不可能である。こう考えてくると、クオリアとクオリティのどちらを大事にすることが私たちの感性の成長につながるかは、おのずと明らかではないだろうか。味の違いや色の組み合わせの見栄えなどについて他人と語り合うことを通じて、私たちは自分の感性を鋭くしてゆくことに関心をもつのである。それによりまた、交わりが生き生きとしたものになってゆく。これに対し、比較を絶して語りえない「私に現れたクオリア」にばかり愛着することは、他人との交わりを粗野なものにしかねず、それゆえ、自分自身の可能性を無為に腐らせていくことにつながるのだ。

「クオリア」のみによって質の問題を論じようとする思想は、感性的認識のもつ本当に豊かな可能性から人の目を閉ざさせるといって、罪深い。「逆転クオリア」言説に至っては、誤謬を押しつけながらこれをなすものであるため、いっそう罪深いのである。また、逆に、質未満の質であるクオリアという次元でのみ質を考えているから、「逆転」といったような粗雑な話を信じてしまうのだとも言えるだろう。哲学風の装いをもったこの種のいかがわしい話から身を守るためには、どのようなことを心がけるべきだろうか。

第一に、少ない知識の中で空想的思弁をもてあそぶのではなく、つねに様々な分野の知識を学び続けることが必要である。知識を広げる努力なしに物事の深い本質を究めてゆけると期待していると、足元をすくわれる。第二に、言語のもつ制約と可能性に敏感になることである。素朴で単純な単語は物事の構造をわずかしか反映していない。色彩の体系のような連続体の、その多重的構造を精密に言い表すには、慣れ親しんだ語彙だけでは不十分なのだ。私たちは、専門的な語彙なども学びながら、物事の関係的で構造的な把握に適した言語使用の能力を培っていく必要があるだろう。以上のような地に足のついた心構えを保つことにおいて、単なるクオリアではなくクオリティを相手にした生活と思考も可能となり、深まってゆくのである。さらにつけ加えて言うなら、「真実か嘘か」より「面白いか否か」に流される人間心理というものがある。これを自覚し、その畏にはまらないよう気をつけることも重要である。

前回の論文を、私は、色のクオリアが逆転しているかもしれないが気づかれないという話は「哲学者たちの都市伝説」である、と締めくくった。実際、検討を進めるほど、これは都市伝説と言うほかない、人を怖がらせるいたずらの類ではないのかと思えてくる。もちろん、「逆転スペクトル人間」そのものは誤った作り話であるから怖がる必要はない。しかし、分別も知性もあるはずの科学

哲学者、言語哲学者、論理学者たちがこのような作り話を精力的に広めてきたことは、本当にうすら寒い、現代社会における真実の怪談である。

<参考文献>

- Carnap, Rudolf (1928), *Der logische Aufbau der Welt*, Hamburg, Felix Meiner Verlag, 1998.
- Chalmers, David J. (1996), *The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory*, Oxford University Press.
チャーマーズ『意識する心 脳と精神の根本理論を求めて』林一訳、白揚社、2001年。
- Hardin, Clyde L. (1988), *Color for Philosophers: Unweaving the Rainbow*, Indianapolis/Cambridge, Hackett Publishing Company.
- Harrison, Bernard (1967), “On Describing Colors”, in *Inquiry*, 10.
- Hilbert, David R. and Kalderon, Mark Eli (2000), “Color and the inverted spectrum”, in S.Davis (ed.), *Color Perception: Philosophical, Psychological, Artistic and Computational Perspectives*, Vancouver Studies in Cognitive Science, 9, New York and Oxford, Oxford University Press 2000.
- Kant, Immanuel (1781/1787), *Kritik der reinen Vernunft*, Hamburg, Felix Meiner Verlag, 1998. 引用箇所の表示に際しては、原典第一版（1781）のページ数をAの後に記し、第二版（1787）のページ数をBの後に記すようにする。
- Wisdom, John (1956), *Other Minds*, Oxford, Blackwell.
- 金杉武司（2007）『心の哲学入門』、勁草書房。
- 公益社団法人色彩検定協会（編集・発行）（2019）『色彩検定公式テキスト』、三級編～一級編。
- 高橋克也（2021）「色のクオリアの逆転など起こっていない ——哲学と絵画への一視角——」、哲学学会編『哲学雑誌』第135巻、第808号。
- 野矢茂樹（1996）『哲学の謎』、講談社現代新書。
- 野矢茂樹（2016）『心という難問』、講談社。